

子どもの心を育て、自己肯定感を高めるための指導の在り方

－自己の生き方についての考えを深めるための取組を通して－

M13EP003

小川 洋子

1. はじめに

最近の子どもたちの実態として、個々の悩みや課題を抱えた子どもが増えていると感じている。(伊藤 2011)は、不登校やいじめ、発達障害などのあらゆる“不適切”な言動や“不健全”な在り方と自己肯定感の低さとは関係があり、学校教育の出発点である小学校において、子どもの自己肯定感を高める取組を考えることは、子どもたちに「生きる力」を獲得させる基盤になる。また、さまざまな教育実践の中で、交流体験や共同作業を通して自分と向き合い仲間と認め合う経験を積み上げることが、自己肯定感を高めることにつながると指摘している。

加えて、もっとよくなりたいと思う心(心の内発的エネルギー)を育てるような道徳の時間を充実させることは、自己肯定感を高めることにつながると筆者は考えている。

今回の学習指導要領の改訂により、「自己の生き方についての考えを深める」という一文が、道徳の時間と特別活動の目標に書き加えられた。この言葉は、生きる力を育むことをねらいとする今回の学習指導要領の改訂のポイントとなる言葉である。

そこで本研究では、自己の生き方についての考えを深める道徳の時間とエンカウンター的な要素を取り入れた活動(以下エンカウンター的な活動)を実践することにより、自己肯定感を高められるのではないかと考え、研究を進めていくことにした。

2. 先行研究

自己肯定感をはぐくむ道徳教育の研究とし

て、平成18・19年度に取り組んだ甲府市立大里小学校の研究がある。大里小学校では、子どもの実態を把握するために福岡県教育センターが作成した「自尊感情5領域テスト」を活用した。(大里小 2007)そこで、本研究では、このテストをアレンジした自己肯定感調査を作成し、子どもの実態把握をすることとした。

また、東京都教職員研修センターで平成20・21年度に行った自尊感情や自己肯定感に関する研究では、「自己肯定感」を「自分を『かけがえのない存在、価値ある存在』として認める感情が育まれる際に働くプラス面の感情と捉えている。(東京都教職員センター 2009)そこで、本研究でも、「自己肯定感」を以上のように捉えて、子どもの自己肯定感を育てるために有効な手立てについて研究を進めていく。

3. 研究の目的

自己の生き方についての考えを深める道徳の時間やエンカウンター的な活動(なかよしスキルタイム)を実践することで、子どもたちの自己肯定感が高まるかを検証する。

- (1) 子どもの心を育て、自己の生き方についての考えを深める道徳の時間の指導法の工夫を探る。
- (2) 自己発見を促し、自己の生き方についての考えを深めるエンカウンター的な活動(なかよしスキルタイム)の指導法の工夫を探る。
- (3) 子どもの自己肯定感調査や保護者の協力による実態アンケートを実施し、自己肯

定感を高めるための一助とする。

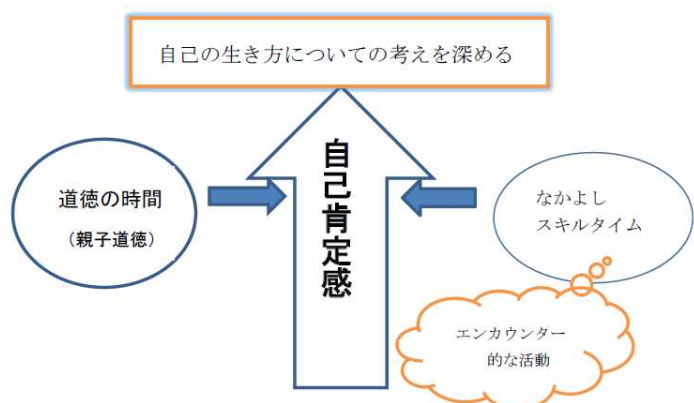


図1 【自己肯定感の育ち】のイメージ

4. 研究の方法と内容

連携協力校である公立小学校の1年生を対象に行う。

(1) 子どもの心を育て、自己の生き方についての考えを深める道徳の時間の指導法の研究

①自己の生き方についての考えを深めるためには、毎回の道徳の時間のねらいが達成できることを重視し、授業力向上のために次の指導法を工夫する。

○資料提示の仕方

- ・一括提示や分括提示などの方法の工夫

○発問の工夫

- ・場面発問やテーマ発問などの発問の工夫

○板書の工夫

- ・右から左に流す一般的な板書
- ・各学習過程をまとめた構造的な板書

○ワークシートの工夫

- ・子どもの心の内面を探るためのワークシートの作り方
- ・親子道徳に使うワークシートの工夫

○心のカードの活用

②保護者と一緒に考える道徳の時間の取組(親子道徳)

道徳教育は、学校だけで行うものではなく、家庭とも連携を図りながら行うべきものであ

る。学校でどのような道徳の授業をしているのかを保護者にも知ってもらい、共に考える機会を作ることは意義のあることだと考える。そこで、保護者と一緒に考える道徳の取組を実施した。

〈1学期〉

- ・道徳の時間で使った読み物資料を宿題として親子で話題にしてもらう取組を行い、話題となったことや子どもの感想などを保護者に記述してもらう。

〈2学期〉

- ・子ども自身が、道徳の時間の終末に、その時間に心に残ったことやテーマについて考えたことなどをワークシートに記入する。それについて保護者に「お子さんへのメッセージ」として記入してもらう。

(2) 自己発見を促し、自己の生き方についての考えを深めるエンカウンター的な活動(なかよしスキルタイム)の指導法の研究

①本研究では、エンカウンター的な要素を取り入れた活動をエンカウンター的な活動として、その指導法を工夫する。

○子どもたちにわかりやすいルールや手順を提示する方法の工夫

○ゲームに参加できない子どもへの手立ての工夫

○シェアリングを重視すること

○子どもがエクササイズを通して何を感じたのかを探るためのワークシートの工夫

○子どもの実態に合わせて、ゲームをアレンジする方法の工夫

(3) 子どもの自己肯定感調査の実施や保護者の協力による実態アンケートの実施

①子どもの自己肯定感調査の実施

- ・6月と12月に実施し、結果を比較する。

②保護者の協力による子どもの実態アンケートを実施

- ・6月と12月に実施し、結果を比較する。

以上のように道徳の時間やエンカウンターの活動を行い、子どもたちの心を育て、その変容の様子について時期を隔ててアンケートなどを行い、結果を比較する。

5. 研究の結果と考察

(1) 子どもの心を育て、自己の生き方についての考えを深める道徳の時間の指導法の研究

① 授業力向上のための指導法の工夫

①—1 実践した道徳の授業と工夫した指導法
子どもたちが、自己の生き方についての考えを深められるような指導法を工夫しながら、表1のように実践をした。

表1 実践した道徳の授業と工夫した指導法

回数	日	資料名	内容項目	工夫した指導法
1	7/9	「るいくんのゴール」	思いやり 親切	テーマ発問に挑戦した。
2	7/16	「はたらけせっせ」	勤労努力	場面ごとに区切って内容を確認しながら発問をしていった。 心のカードを活用して、子どもの心の内面を表現させた。
3	10/15	「はしの上のおおかみ」	思いやり	くまに会う前と後で、おおかみが変化した理由をテーマ発問にして展開した。
4	10/29	「私たちの大切な日曜日」	家族愛	主人公の心情にせまるために、場面絵に着目させた。
5	11/12	「くりのみ」	友情・信頼、 助け合い	ペープサートを使って、ロールプレイを取り入れた。 板書を構造化して、授業前と後で考えがどう深まったかを比較しやすくした。
6	11/26	「ろくちゃん」	勇気	子どもの発言を類型化して板書した。

①—2 発問の工夫

1回目の「るいくんのゴール」の授業では、テーマ発問(本時のねらいに関わる投げかけ)に挑戦してみた。しかし、1年生の発達段階としては、いきなりねらいに迫るテーマ発問を提示しても、資料の内容が十分に理解できず、考えを深めることができなかった。

そこで、2回目の「はたらけせっせ」の授業では、場面発問(それぞれの場面での投げかけ)を中心に、それぞれの場面での主人公の心情に寄り添った発問をしておいてから、中心発問をする展開にしたところ、ねらいへの達成度は高まった。やはり、発達の段階に合わせて、きめ細やかに発問を工夫する必要があると感じた。各授業での「ねらいの達成度」は、図2のとおりである。

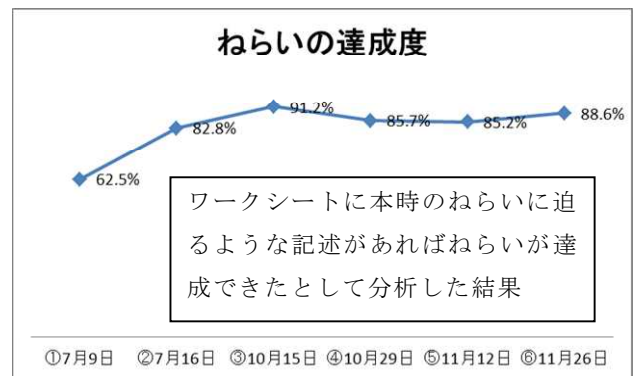
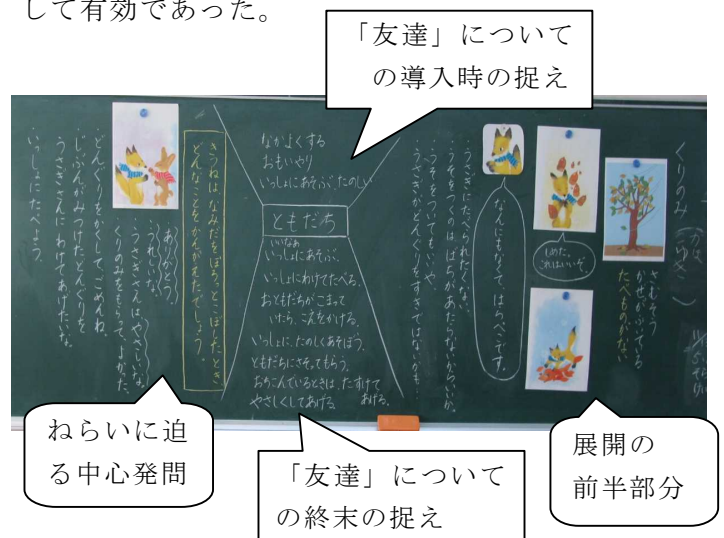


図2 ねらいの達成度

①—3 板書の工夫

5回目の「くりのみ」の授業では、「友達」についての捉え方を導入の時と終末で比較できるように工夫して板書した。このように、板書を構造化することによって、子どもたちが視覚的に考えの深まりを実感することができ、本時のねらいとする価値に迫る手立てとして有効であった。



①—4 指導法の工夫についての考察

毎回同じスタイルで道徳の授業を行うのではなく、資料の提示の仕方や板書の工夫・心のカードの活用など、子どもの実態や資料の内容・ねらいなどに応じて、様々なスタイルで行うことによって、子どもたちの考えを深めることができるし、何よりも、毎回、新鮮な気持ちで道徳の授業に臨めるということが実感できた。(図2を参照)

そのような工夫を行うことによって、「はたらけさせ」(勤劳努力)の授業の時には、「ありさんは、あつくても、あそびたくても、ふゆをすごすためにはたらいてえらいとおもった。ぼくもありのようになりたい。」などの記述や、「はしの上のおおかみ」(思いやり)の授業の時には、「くまさんがやさしくしてくれたから、おおかみさんもやさしくしてくれた。ぼくもくまさんみたいにしたいなあ。だから、ぼくもゆずってあげるよ。」など「自分だったらこうしたい。」という前向きな記述が多く見られ、1年生なりに、自己の生き方についての考えを深めるきっかけになったように思う。

尚、実習校は今年度より県教育委員会の道徳教育推進校に指定され、全校体制で道徳の時間の充実に取り組んでいる。私の授業に加えて、担任も道徳の時間を大切にして工夫した授業を行っている。このことも、子どもたちの心の育成に功を奏しているように感じる。

②保護者と一緒に考える道徳の時間の取組 (親子道徳)

②—1 子どもの実態に合わせたワークシートの工夫

〈1学期〉

1年生はまだ平仮名の習得が完全ではないので、文章化(外化)が難しい。そこで、親子で話し合った内容を保護者に代筆を依頼し、各家庭での取組として実施した。(図3)

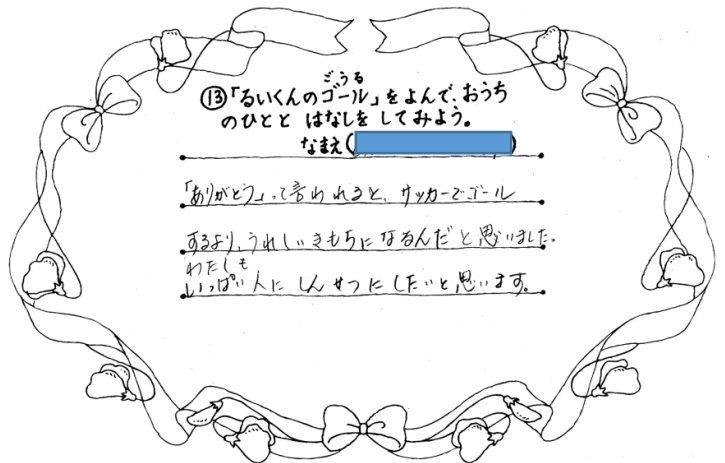


図3 代筆してもらったワークシートの記入例

〈2学期〉

自分で文章が書けるようになってきたので、その時間に心に残ったことやテーマについて考えたことなどを自分で道徳の時間の終末に記入した。宿題として、親子で同じ資料を読んだ後、保護者に「お子さんへのメッセージ」の記入を依頼し、各家庭での取組として実施した。(図4)

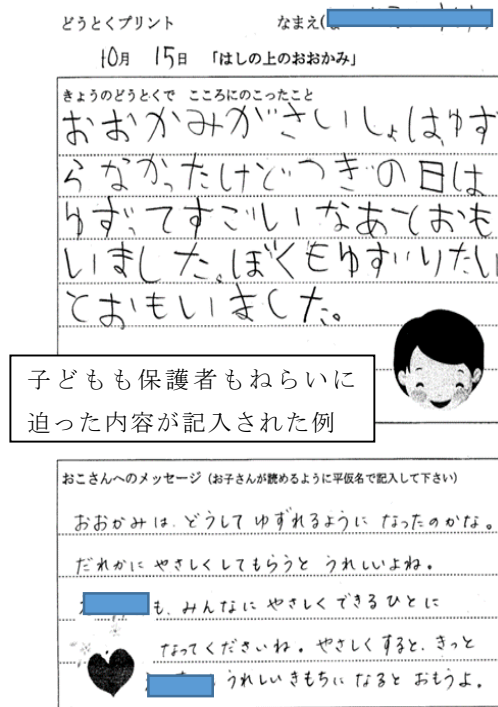


図4 子どもの記述と保護者のメッセージ

②—2 事前に道德の時間のねらいを保護者に知らせてから取り組む工夫

親子道德の取組をしていく中で、保護者の記述が、ねらいからずれてしまうことがあるということが課題として見えてきた。例えば、5回目の「くりのみ」の授業では、「友情・信頼、助け合い」の内容項目だったが、保護者のメッセージには、「友達には、思いやりの気持ちをもとうね。」や「嘘はいけないことだね。」など、本来の内容項目とは別のことを伝える記述が多かった。

そこで、6回目の「ろくちゃん」という資料を扱って、「勇気」についての授業をする際には、保護者に事前に授業のねらい(生活の中で、よいことや正しいと判断したことは、恐れずに進んで行おうとする態度を育てる)をお便りで伝えてから親子道德に取り組んでもらった。そうした結果、保護者からのメッセージもねらいとする価値の自覚に役立ち、考えを深めるような内容を書いてもらうことができた。

②—3 親子道德の考察

保護者に、親子道德についての感想・意見を記述してもらったところ、

- ・子どもたちが授業でどんなことをやっているのかがわかり、実際の生活の中で、生かすことができた。
- ・子どもと一緒に一つのことに對して話をする機会がもてた。
- ・親子で取り組むという機会も少なく、更に道德的なことに對して、普段なかなか話す機会もなかったため、一番基本的な部分を親子で話し合える良い機会となった。
- ・親自身が道德について考えさせられるよい機会となった。

など、とても前向きな記述が多かった。

道德教育は、学校で行うだけではなく、家庭とも連携して同一步調で行うことによって、より効果が上がる。学校で実践している道德

の時間で、どのようなことに取り組んでいるかを家庭に知ってもらうことは、指導の効果を高めるためには必要だと感じた。その意味で、親子道德の取組は有効であったと思う。

一方、

- ・子どもたちは一度授業で取り組んできてしまうので、親子で本当に同じスタートラインから読んで考えて話し合うという取組も良いのではないか。
- ・他の保護者はどんなことを書いているのかを交流する機会があると参考になってよいのではないか。

などの改善点もあげられた。これらの意見も取り入れながら、授業参観で親子道德をするなど、更に家庭との連携を充実させるための取組を工夫することもできると感じた。

(2) 自己発見を促し、自己の生き方についての考えを深めるエンカウンター的な活動(なかよしスキルタイム)の指導法の研究

①実践したなかよしスキルタイム

仲間と認め合い、自己発見を促せるような内容の活動を表2のように実践した。

表2 実践したエクササイズとその内容

回数	日	エクササイズ名	エクササイズの内容
1	6/27	「あいこジャンケン」 「あいさつジャンケン」	あいさつの良さに気付く作戦
2	7/4	「誕生日で並ぼう」	しゃべらないコミュニケーション
3	7/18	「一学期にがんばったことジャンケン」	一学期にがんばったことを認め合う
4	10/24	「いーれて」 「一緒に遊ぼう」	遊びに入れてもらったり誘ったりする時の言葉がけ
5	11/7	「仲間さがし」	みんなと協力する
6	11/21	「ふわふわ言葉ジャンケン」	相手に気持ちを込めて伝える言い方
7	12/3	「いいところさがし」	友だちのよいところを伝え合う

②シェアリングを重視

毎回、エクササイズを行った後に、シェアリング(振り返りの共有)の時間をたっぷりとった。そこで、友達の見聞を聞くことに

よって、「〇〇ちゃんは、そんなことを考えていたんだなということがわかった。」などと新たな発見をしている子どもがいた。このように、多様な意見を受けとめたりすることができ、自分の考えを広めることができていた。

やはり、ただエクササイズをして終わるのではなく、お互いに意見を交流することは、自己発見の促進や友達の良い面の発見を促すためには、有効であったと思う。

③ワークシートの工夫

ワークシートを単に「感想を書く」という形ものから、「見つけたことや考えたこと」を記入することによって、「楽しかった」などという表面的な記述から、「あいてのかおをみるのが、はずかしかったから、れんしゅうになった。」や「ともだちといっしょにあそぼうっていうときに、れんしゅうになった。」など、エクササイズを通して、どのようなことを感じたかという内面的な記述に変化してきた。ワークシートの形式を工夫することも、自己発見を促すことにつながるということがわかった。

④なかよしスキルタイム全体の考察

子どもたちは、毎回の活動をとっても楽しみにしていた。活動の様子から、普段あまり友達と上手く関われない子どもが、とても生き生きと活動している姿が見られた。

また、「いーれて」の作戦をした後、休み時間や体育のゲームの時に元気よく「いーれて」と声をかけている姿が見られたり、「ふわふわ言葉」の作戦をした直後にけんかが起きた際に、「相手に気持ち伝わる謝り方をしないとダメだよ。」と喧嘩を仲裁したりする姿が見られた。このように、エクササイズで活動したことが普段の生活に生かされている場面も見られたことから、この活動が有効であったと考えられる。

一方、エンカウンター的活動を繰り返し行

うことによって、相手とコミュニケーションをとるには、「相手の顔を見る」「はっきり聞こえる声で言う」「笑顔で言う」ことが大事だということに多くの子どもが気付いてはいるが、それを普段の生活に生かすことまでは至っていない子どもが多い。同じエクササイズを短時間でもよいので、継続的に繰り返し行う必要があるということがわかった。

(3) 子どもの自己肯定感調査や保護者の協力による実態アンケートの実施

①子どもの自己肯定感調査の実施

①-1 子どもの自己肯定感調査の結果

6月（第1回目）の調査による子どもの実態は、表3で示すように、2と7と10の項目の数値が低かった。

12月（第2回目）の調査による子どもの実態と比較してみると、ほとんどの項目で肯定的な数値の方が高くなったが、7と8と9の3つの項目の肯定的な数値が、極端に低くなった。この3つの項目に共通している点は、自分についての項目であるということである。

①-2 子どもの自己肯定感調査の考察

6月（第1回目）の調査で数値が低かった中でも、2と10の項目で改善が見られたのは、エンカウンター的活動の取組の効果の表れもあるのではないかと思う。相手を尊重したり、友達の良い面を認めたりする活動を意図的計画的に実施することによって、自分が認められたという、自己をプラスに捉える感情が育ったのではないかと思う。

12月（第2回目）の調査で7と8と9の自分についての項目で数値が低くなったのは、自己評価の基準が関わっているのではないかと思う。自己評価の発達には、幼児期と学童期があり、学童期に入り、年齢が進むほど、現実の自分をよりの確に評価できるようになる。学童期以降では、自分を仲間との関係で比較することが、自己評価を促進する。自身

表3 子どもの自己肯定感調査 集計結果 *は1回目の注目点 ▲は2回目の注目点

アンケート項目	肯定数		否定数	
	1回目	2回目	1回目	2回目
1 わたしには、ともだちが たくさんいます。	33	32	3	4
2 ともだちは、わたしのはなしを しっかりと きいてくれます。	23	27	13*	9
3 わたしは、べんきょうが たのしいと おもいます。	32	34	4	2
4 わたしは、べんきょうが よくわかります。	33	36	3	0
5 わたしは、おうちのひとに だいにされています。	34	36	2	0
6 おうちのひとは、わたしのことを ほめてくれます。	31	34	5	2
7 わたしは、じぶんのことを かついい(かわいい)とおもいます。	25	18	11*	18▲
8 わたしのえがおは、すてきだと おもいます。	28	20	8	16▲
9 わたしは、じぶんのことが すきです。	30	15	6	21▲
10 わたしは、とくいなことや じまんでできることが あります。	24	28	12*	8

を他者と比べることによって、自己評価がより現実的になった(岡本・菅野・塚田, 2004)という解釈がある。このような考え方からすると、数値の低下の意味は、自己評価の基準が上がったと考えることができるのではないかと思う。

実際に、6月に7・8・9の3項目を肯定的に捉えていたが、12月に3項目とも否定的に捉えた子どもが6名いた。その子どもたちが授業中に記述したワークシートの内容を分析してみたところ、どの子どもも授業のねらいに対して意欲的な記述が多く、否定的な記述はほとんど見られなかった。

調査では、否定的に自分を受け止めているような結果となっはいるが、それは、自分だけの世界から他者へ目を向けるようになり、そこで、他者と自分を比較することによって、自分自身を見つめることができるようになったともいえるのではないだろうか。つまり、自己の生き方についての考えが深まった結果ではないかとも思う。

しかし、今後必要となってくるのは、子ども自身が自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気づける(自分を好きになる)ような働きかけを、道徳の時間を要と

して、教育活動全体でしていくことだと思う。

②保護者の協力による子どもの実態アンケートの実施

②-①保護者の協力による子どもの実態アンケートの結果

6月(1回目)のアンケートによる実態は、表4で示すように、(2)(4)(12)の項目が特に数値が低かった。

12月(2回目)のアンケートによる実態は、表4で示すように、6月(1回目)で数値が低かった項目に加えて、(1)(5)の項目も数値が低かった。特に、(5)の項目は、自由記述欄にも「あいさつが進んでできない。」「慣れた場所では元気にあいさつができるが、そうでない場所ではまだまだ言えない。」という記述が多く、「あいさつ」について課題だと感じている保護者が多いことがわかる。

②-②保護者の協力による子どもの実態アンケートの考察

6月のアンケートの結果を受けて、数値の低かった項目を意識して、道徳の時間やエンカウンター的活動を意図的に取り入れた。例えば、道徳の時間では、勤労や友情・信頼、思いやりをねらいとする授業を行い、エンカウンター的活動に、「あいさつジャンケン」などのエクササイズを取り入れ、保護者のアンケートを生かす取組を実施した。(表1, 表2参照)

6月(1回目)の結果と12月(2回目)の結果を比較すると、全体的に数値が下がっているが、自由記述欄の内容を見てみると、「友達と仲良く遊べるようになった」「人に親

表4 子どもの実態アンケート集計結果*は1回目の注目点 ▲は2回目の注目点

項目	1が最も肯定的、4が最も否定的の4択		1	2	3	4
(1) 規則正しい生活が身についている。	▲	1回目	15	18	2	1
		2回目	14	17	5	0
(2) 自分がやらなければならないことをしっかりやる。	*	1回目	3	26	6	1
		2回目	5	21	9	1
(3) よいことと悪いことの区別ができる。		1回目	12	20	4	0
		2回目	9	26	1	0
(4) うそをつかない。	*	1回目	9	20	7	0
		2回目	6	25	4	1
(5) あいさつがしっかりできる。	▲	1回目	15	18	3	0
		2回目	10	15	11	0
(6) 人に親切にする。		1回目	18	17	1	0
		2回目	16	18	2	0
(7) 友だちとなかよくする。		1回目	21	15	0	0
		2回目	23	12	0	1
(8) ありがとうを進んで言える。		1回目	13	20	3	0
		2回目	14	17	5	0
(9) 生き物を大切にする。		1回目	20	14	2	0
		2回目	20	15	1	0
(10) 美しいものや素晴らしいものに感動する。		1回目	20	14	2	0
		2回目	21	12	3	0
(11) 約束やきまりを守る。		1回目	7	26	3	0
		2回目	10	20	6	0
(12) 働くことのよさを感じてよく働く。	*	1回目	13	17	6	0
		2回目	13	14	9	0
(13) お手伝いをして、家族の役に立つ。		1回目	19	14	3	0
		2回目	16	17	3	0
(14) 楽しく家庭や学校生活を送る。		1回目	29	7	0	0
		2回目	25	10	1	0
(15) 地域の行事に参加する。		1回目	24	8	3	0
		2回目	25	9	2	0

切にしている(思いやりの心を持っている)」などの他との関わりについての記述が多く見られ、全体的に子どもの成長を感じている記述が多かった。子どもの道徳性調査の項目でも言い及んだが、保護者自身も子どもを評価する基準が上がったために、数値が下がったということも考えられるのではないかと思う。

今後必要となってくるのは、保護者が課題だと感じている項目について、家庭と共通理解を行い、連携を図りながら、年間計画の中に道徳やエンカウンター的活動を位置付けて、取り組んでいくことだと思う。

6. 成果と課題

「自己肯定感を高める」ために、今回は、道徳の時間とエンカウンター的活動に焦点を当てて、自己の生き方についての考えを深める実践を行った。子どもの自己肯定感調査や保護者の協力による実態アンケートから、自己肯定感を高めるための手がかりや実態に基づいて、次の一步として、どのような指導をしていくことが必要かということがつかめた。

また、週1時間の道徳の時間を大切にしたり、エンカウンター的活動を積極的に取り入れたりすることによって、子どもが自己の生き方について考えを深めるきっかけ作りをすることはできた。

更に、親子道徳に取り組んでみて、保護者と連携しながら道徳教育を進めていくことの重要性についても実感することができた。

今後の課題としては、道徳の時間やエンカウンター的活動で子どもたちが考えを深めたことを

どう評価し、どう実践につなげていくかということである。心という目に見えないものを育てることは難しいことだが、生きていく上で、とても大切なことである。また、子どもの心を育て、自己肯定感を高めるためには、学校教育だけではなく、家庭や地域と連携を図っていく必要がある。それらのあり方について今後も研究していきたい。

〈参考・引用文献〉

- ・伊藤美奈子(2011)「児童の自尊感情を育む学校経営」月刊教職研修3月号
- ・岡本依子, 菅野幸恵, 塚田一城みちる(2004)「エピソードで学ぶ 乳幼児の発達心理学」新曜社 P106~107
- ・甲府市立大里小学校(2007)「平成18・19年度文部科学省児童生徒の心に響く道徳教育推進事業研究紀要」
- ・東京都教職員研修センター(2009)「自尊感情や自己肯定感に関する研究」
- ・文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 道徳編・特別活動編」